

# 『ゴッドファーザー』と 『北の国から』

内田樹

(思想家)

マイケル・コルレオーネと、『北の国から』の黒板五郎——  
ふたりは家族観において、深い共通点で繋がっているという。  
彼らの対極にヴィトー・コルレオーネを置くことによって  
見えてくる人生訓を語ってもらった。



PART IIのラストシーン。兄弟たちの去った食卓でマイケルは独り煙草をくゆらす。  
image supply by capitalimages/amanaimages

変なタイトルをつけてしまった。でも、この二つのドラマを突き合させてみると、『ゴッドファーザー』(サーガ(叙事詩))の思いがけない層に掘り当たるのではないかという気がしたので、それについて書くことにする。

この二つのドラマを併せて論じるというアイデアのきっかけは、酒席で隣に座った年若い友人から聞いた愚痴である。

「上司から『北の国から』というドラマを観ろと勧められて観たんですけど、少しも面白いと思わなかつた。正直にそう言つたら、まわりの人たちから『血も涙もない男だ』と罵られた」

「あれはいittai、どういう話なんですか。どうして、あんな話にみんな感動するんですか」と彼から質問されたので、少し考えてこう答えた。

「『北の国から』は、家族というのはついにお互いを理解し合うことはないものだという痛ましい真理を、ただそれだけを描いた物語なのだと思つ。事実、この長いホームドラマの中に、家族のメンバー同士が互いに深く理解し合い、共感し合うという場面はついに訪れない。その責任はひとえに黒板五郎(田中邦衛)という父親にある。彼が『家族というのは理解と共感によつて結ばれていなければならない』と思い込んだせいで、家族は離散してゆく。その悲劇が視聴者の心の琴線に触れたのだと思う」

そう言うと、彼はしばらく中空に目を泳がせていたけれど、「なるほど」と頷いた。たぶん彼は『北の国から』のことを「心温まる、いい話」だという先入観を持つて観たので、「なんか違う」と感じたのだろう。でも、本当を

言うと、あれは「心が冷えるような、つらい話」なのである。そして、多くの視聴者は「これはうちの家族の話だ」と感じて、しみじみした気分になつたのだと思う。

その時に、ふと思いついて、「だから、『北の国から』と『ゴッドファーザー』はほとんど同じ話なんだよ」と話を続けた。

「マイケル・コルレオーネ(アル・パチーノ)は黒板五郎なんだ」と言つてから、自分でも「なるほど。そうだったのか」と腑に落ちた。私一人で勝手に腑に落ちられても困るであろうから、その所以を以下に説明して、私の『ゴッドファーザー』論としたいと思う。

## 家族が瘦せ細つてゆく物語

『ゴッドファーザー』は家族の物語である。緊密に結びついていたように見える大家族がやがて一人ずつそのメンバーを失い、離散瓦解する物語である。そのことに異存のある方はいないだろう。家族たちは、ある者は死に、ある者は

殺され、ある者は家族を憎み、あるいは家族に憎まれる。

第一作では、ファミリーの後継者である長男ソニー(ジェームズ・カーン)が殺され、偉大な家父長ヴィトー・コルレオーネ(マーロン・ブランド)が病で死ぬ。三男マイケルはシチリアで結婚した新妻アポロニアを目の前で爆殺される。長女コニー(タリア・シャイア)の夫カーロはマイケルに殺される。

第二作では、妻ケイ(ダイアン・キートン)が夫に知らせずに子どもを中絶したことから夫婦は危機的な関係になり、コルレオーネ家を情緒的に統合していた母が死ぬと、マイケルはアミリーを裏切つた次兄フレドを殺す。第三作ではマイケルはシチリアにおける彼の保護者だったドン・トマシーノを殺され、娘マアリー(ソフィア・コッポラ)を殺される。

マイケルを中心になると、彼の家族は『ゴッドファーザー』サーガの間に、父と母が死に、長兄が殺され、自分の手で妹の夫と次兄を殺し、妻には子どもを殺され、父代わりだった人を殺